この世の挽歌——日本語版自序

一

私は今まで何度も日本の古書店を見て歩いてきた。狭いけれどもきれいに整頓された木造の書架には、驚くほど多数の中国古典籍の翻訳書が並んでいて、魯迅や沈従文など、現代文学の大家のものもその中にある。それらの作品は東京や京都の街角にひっそりとたたずんでいて、失われた経典や文化の記憶が、外邦の言葉によって保持されているかのようである。それは文化の貸し借り、相互の啓発の時代であり、中国が輸出したものは、知識や技芸のみならず、「天人合一」の哲学もあった。千年の長きに及ぶ交流で、お互いに先賢の才華と知恵を享受してきた。

私はこれら翻訳書を前にして、いわゆる民族の誇りを持ったことは一度もなく、逆にいつも密かな劣等感を抱くのであった。それは次のような事を意味するからである——遥かな過去において、中国の文化や文学は、魅力的なものとして珍重され紹介されてきたであろう。ところがこの数十年の間は、外国の読者を感動させ、注目されて翻訳紹介される著述はあまりない。

多くの人は、鑑真の東渡や遣唐使の西遊がもたらした詩文や礼学の昔の夢に浸っている——中国の典籍や文学は、日本では啓蒙や教養の源泉とされ、その地位はとても高かった。

Sample

しかし戦後の現代において、我々は、文明世界の間の交流に値する、どのような思想や文芸を有しているのか。かつては輸出する側であった中国は、今は国際交流において発言できるものを持ちあわせていない。一人の物書きとして、私は落差のあるこの時間の断層に立って、深い羞恥を覚えるとともに、ある種絶望的な未来を密かに見るのである。中国語は、言い難い各種の要因によって、これからは他国の書店に、ただ重々しく空の書架を残すだけなのであろうか。

二

古代は、中国が日本に影響を与えた時代だったならば、近現代以降は、日本が中国にお返しをした時代であるといえよう。二十世紀の初頭、中国の新文学は日本からの移植によって誕生した。魯迅や郁達夫は、日本留学時に、日本語の翻訳を介して西方の小説・散文を読み、その写実主義・現代主義の筆法を持ち帰って、そこから中国白話文学の新世紀を切り開いた。郭沫若も同じく最初の新詩集『女神』を日本で書いたが、このような自由な抒情の形式・個人的情熱の高揚は、すべて日本が西方の潮流を受けた後に再伝したものである。当時この日本留学生たちの帰国がなかったら、中国の制度革命や新文化運動は、何年も遅れていたであろう。

更に深刻なのは言語自体の改変であった。今日我々が常用している現代中国語の語彙の中には、清末民国初頭に日本人が西方の概念を翻訳し、それが中国に伝わって形作られたものが大量に存在する。たとえば、「社会」「文化」「民主」「自由」、更には「文学」という語も、近代以前では日常に常用する用語ではなかった。これらの語彙がなければ、我々は一篇の現代文も書くことはできないであろうし、更には世界の思想の新しい潮流についていくこともできない。現代中国語のすべての表現体系は、日本の学者の創造と貢献によっていることを認めねばならない。

科学や学術の領域は猶更の事である。明治以来の日本は、西洋の学問が東へと伝わる中で、率先して制度と学術の翻訳を完成し、これらの成果は中国の知識人によって大量に吸収された。康有為・梁啓超の維新思想は勿論のこと、後の五四運動の時代の啓蒙思想や科学精神も、すべて日本の影響を深く蒙っている。今日に至っても中国の大学の学問体系の中に、この種の「舶来語」の痕跡をはっきりと見ることができる。日本は近代中国留学生の最大の目的地であったのみならず、代々の思想啓蒙者の出発点でもあった。

三

日本文学は、わたし個人の著作と生命観に対しても深い影響をもたらしている。青春時代に初めて俳句を読んだとき、精緻な言語を使って、どのように四季の有様と人生の感慨を瞬間に凝縮するかを本当に理解した。それはある種の深く厚い簡潔さであり、文字が含みもつ高貴さでもある。翻訳ではあるが、随筆『枕草子』を読んで、平安の宮廷女子の繊細と機敏に圧倒された——彼女たちの文学において、日常の事どもは、審美によって豊かな趣味に変

容する。川端康成の作品には、氷や雪のような清冽さがあり、「物の哀れ」の感覚を極限にまで押し進めている。また大江健三郎は、重々しい道徳的責任と政治的反省をもって、戦後の廃墟の陰影に人類が直面することを促す。

世界文学の舞台において、日本の近現代文学の地位は、疑いもなく中国より遥かな高みにある。これはノーベル賞の栄誉のみならず、簡潔で鋭利、また独特の言語の風格によって、現代世界に影響を与え続ける能力を備えているのだ。わたし個人について言えば、『葉隠聞書』に説かれる人生観を崇拝さえする。死を日常と考え、「剣及履及（決然として迅速に事を行なうこと）」[*1]によって命の尊厳を守る態度は、中国が早くに失ったある種の遊侠の精神を常に想起させる。日本の古典的美学の中には、我々自身が失った「気高さ」を保存している――形式に対する尊重、時間や万物に対する敏感さ、及び生命に対する深い愛の凝視。

字形がこれほど似ている両種の文字を前にして、それによって形作られた文学や思考に今日見るような差異があることに、私は心の内に引け目と悲哀を深く感じる。もちろん一種の奇妙な感謝の気持ちも抱く――これらのほぼ同じ源に発する文字は、ずっと私に成長のための滋養を提供する。ある意味では、我々自身が失った清潔さと高雅さの一部を守ってくれている。

四

私の家族も日本と些かの縁がある。母の外祖父は清末の一九〇八年前後に、扶桑［日本］に渡って法律を学んだ。そこであしかけ八年の時間を過ごした後に、帰国して中華民国の最も初期の地方裁判官になった。外祖母の記憶によれば、その頃の青年は国家を振興させるという理想を抱いていたが、日本の当時の法治の教育は彼らが最も敬慕した道であった。

しかし歴史は彼らに平穏な落ち着き先を与えなかった。この裁判官の娘が私の外祖母であるが、その後、黄埔士官学校の士官候補生――つまり私の外祖父に嫁いだ。彼らは結婚した後、私の母をもうけたが、この家庭の温もりは、すぐに戦争によって引き裂かれた。中日戦争の勃発によって、夫婦は別れ別れになり、母と娘は困窮し、彼らの生活は長い離散と苦難に陥った。

わが家族の運命も、この不幸な戦争に深く絡み合っていたと言える。私の母は動揺と苦難の中で成長したが、一生涯あまりにも多くの言い難い恥辱を背負った。そして、ついに一九九五年に長江に身を投げるという方法で命を終える選択をした。彼女は自らの人生を長江の水に委ねたが、私は、それからは家族の記憶と友人たちの運命を書き綴る任務を背負った。これが『長江に消えた母』という書物の来歴である。それは雄大な歴史記述ではないが、一人一人の底辺の人物の苦難の記録であり、赤い中国が草の根の運命を変え踏みにじった事への追及でもある。

十年前、私は東京大学の招きを受け、初めて独立作家[*2]の身分で日本を訪れて、中国社会に関する講義を行なった。そこでは私は目下の中国民間の、長期にわたって植え付けられたために盛行する民族主義的な憎悪に言及した。その時、私の心中には複雑な悲哀があった。というのも、党と国のイデオロギーによって扇動された感情によって、多くの一般の人々は

*1『春秋左氏伝』宣公十四年に見える語。

*2 中国の作家は共産党が指導する中国作家協会に所属して活動するのが普通で、協会は共産党の指導のもとで文学事業の繁栄を図る。著者は協会に入らず、体制に属していない作家である。

歴史を正視するすべがなく、また隣国と対等の理解と対話を展開するすべがない事を、私は知っているからである。国家間の悲劇は、しばしば無数の庶民の家族の中で、底深い苦痛となる。これこそが真実の歴史である。

五

本書『長江に消えた母』は虚構の作品ではなく、その各篇すべてが私の身辺で本当に起こった生死・離散・愛恨である。私はこの苦難の世紀の当事者であり、おろそかにされたあの命、埋められたあの声を記録しなければならない。これは母のための祭文であるだけでなく、時間の中に消えていったすべての人の魂を書きとめた証言なのである。大きな歴史はしばしば冷たく愛がないが、文学は個人の涙や息遣いを留めることができ、官製の歴史では捨てられた物語をもう一度暖かく書き起こしたものである。

本書は初め台湾で出版された時、意外にも台北国際ブックフェアにて「ノンフィクション図書大賞」及び独立中文ペンクラブの「自由著作賞」を獲得した。これは私の文章がよくできているというのではなく、台湾の読者が対岸の同族のもう一つの声を聞きつけたからであった。その後、幸いにも英語、フランス語の翻訳本が成って、そこに描かれた悲しみや忍耐が、異なる土地においても共鳴を引き起こした。このことは、文学の価値は、差異をなくすというのではなく、境界を超えて人類に共通する悲哀と記憶を呼び起こすものだということを私に知らしめた。個人の命の苦難と愛は、常に人の心に相通じる感情なのである。

いま本書が日本で出版される機会を得たのは、全くある特別な機縁による——二〇二四年の冬に、友人の一愷先生とともに、風雪の中、日本の中山道を歩いた。その後京都で、かねてより存じ上げお会いしたいと思っていた王小林教授とお会いした。彼はずっと中日の文学・宗教・神話・思想史の方面の研究を重ねてきた方である。このお二人の大きな力添えによって、ついに拙著は中国語学者の佐々木猛先生と国語学者木田章義先生、さらにさいはて社代表の大隅直人氏の高評を得た。これにはいろいろな思いが交錯する。まず翻訳者に感謝せねばならない。皆様のご協力によって、私の文章の背後にあるリズムや情感を、緻密に日本の読者に届けてくれた。また出版社の編集や制作の方々に感謝しなければならない。彼らの善意と理解で、中国では禁書である本書が再び新しい命を得ることになったのである。

どの作者も文章によって縁を結び、世間で一層多くの知遇を得ることを望んでいる。しかし、外国の書籍の出版は今日では困難である事を、私はよく分かっている。幸いなことに、ある種の情感は翻訳の必要のないものである。友人との愛、命の別れ、郷愁の呼びかけ、これらはすべて言語を超えた人類共通の体験である。川の水が大地を流れるように、すべての人の喜びと悲しみ、出会いと別れを運んでゆく。私の文章が、古くからあることわざ——一衣帯水（いちいたいすい）、一葦渡江（いちいとこう）（両国間の帯のように横たわる海を、葦（あし）の一本の葉が渡ってゆく）にあるように、現代の中国人の奇異な運命を背負って、一人一人の読者の心の岸に向かうように願っている。

二〇二五年八月　タイ国チェンマイにて

この人生にとどまり、松明を新しい薪に伝える[*1]——序に代えて

なかなか想像しがたいことだが、人類には「自由」を冠する賞が今なお存在していて、しかも、それが表彰するのは、「創作の自由」というあの天賦の権利であり、黙々と苦行する中国語の著作者なのである。

一つの民族及びその文章が、三千三百余年にわたって刻まれてきた後にも、自由に書くその本源になおも到達することができないのは大変珍しい。まだ奨励という方法でその使用者を励ます方法で、言語が本来持つ自由な属性を実践する必要がある。

また、この故に、この賞が命名されるに際して、中国語という言葉は、人類の各言語を前にして気まずいものとなる。幸いにも、些か孤立している受賞者の顔ぶれの中に立つ時、私はまな板の上の魚になって、心の鱗は次々と剥がれおちていく——我々は世界を前に、我々の怯懦、軟弱、そして絶望下の抗争を赤裸々に述べる。

いわゆる三千年の文明史の背後で、我々の母語の著作が真の自由を実現することは少なかった。精神のレベルであろうが、或いはまた世俗の権利であろうが、自由とわが民族はまるで氷と炭のようなものであり、ひとたび遭遇すれば、焼かれるような激痛に見舞われるのである。六十年来、人類の各種の憲章に書き込まれたこの神聖なる言葉は、大陸の辞書にお

*1 この文章は、独立中文ペンクラブ「自由著作賞」受賞の挨拶として二〇一〇年に書かれた。

Sample

いてはほとんど罪悪に等しいものとなっている。数えきれない文字の獄によって、無実の罪で死んだ魂の血の色が一面に広がり、言葉によって罪を得る者は後を絶たない。自由を危険な道とみなしたり、自由を待ち焦がれたりする。自由の聖火は極東の希薄な空気の中では、蛍の光のようにかすかで、この苦難の民族の傷だらけの魂と前途を一貫して照らすことはできなかった。

この大地には自由のために著作する無数の人々がいて、多くは追放され流刑に処せられ、喉を割かれ舌を抜かれた。血は中原を潤しても、ずっと自由の勁草を育むことがない。屍は通りに横たわり、専制の恐怖の生臭さが自然にひろがってゆく。学問のある無数の人々は、著述を一種の計算方法とするしかない。この全体主義が作り出す功利的な犬儒主義［冷笑主義］の時代では、彼らは慎重に言葉を選びながら俗世の功名と利得を求める。

長年にわたって、我々は、このような虚偽、臆病、ひいては卑屈なまでの言論環境の中で生きることに慣れてしまった。幼い頃から、屠殺者にこびへつらうための淫らな歌や巧みな技術を叩き込まれた。正直と誠実な言説――このような人としてあるべき品位は、なんと、珍しいことに広々とした大国の中では希少な美徳に変化してしまった。

我々は体制に迎合し、邪悪にひれ伏し、衰えた世の中の濁った波に便乗して悪事をはたらく。小人症のような胸の貧血、カルシウム不足の骨でも、暴力を用いることなく、この恥ずべき小人政治の時代と完璧に姦通交合しているのだ。

怒りを抱いて暴君に警告を発する作家はまれで、目に涙を浮かべて民草に忠告する宦官に

は不足しない。栄冠を手にした立派な著名人は、著作は身の丈ほどもあるのに、まったく人間の言葉は持たない。彼らはその時に存在する検閲や弾圧そして冤罪による投獄を見て見ぬふりをしながら、あろうことか世界に対して恥ずかしげもなく公言する――ここは創作が自由の国だ。

私はいつも思うのだが、漢字や漢文を創造したあの先達、志を語り、道を説き、批判を行ない、罪を伐つ、偉大な伝統を唱導したあの遠い祖先は、どれほどすさまじく怒るだろうか。一つの最も暗く不条理な世紀は、意外にも歴史に記録され確認されることはない――自ら体験し目撃した我々ひとりひとりは、この種の失語によって前世来生に恥じることになろう。

長い間、私は、このような恥辱を背負って母国の大地を歩き、山河の平らでないことに怒り、万古の長刀を研ぎ澄ましてきた*2。大地は呻き、その声は心に突き刺さる。書き終えて筆を置けば、涙は枯れ天は寒気に覆われる。これはなんという末法の世なのか。悪事をなす者は権勢を恣にし、民衆は愚弄され踏みにじられる。平らに削られた一面の荒れた墓地の上で悲しみも抹消され、石碑は崩れ落ちて夕暮れに風化してゆく。何代もの人々の血まみれの苦難は、今に至るまで夜の祈りの鐘の音が鳴るのを聞いていない。

我々が生きて見てきた時代をそのまま語ることは、本当に果たしてそんなに困難で危険なことだろうか？

いわゆる自由に書くとは、先端の技法ではないし、さらに想像されているように危険で登るのがむつかしいものではない。それは、誠実に時間という砂塵のなかを這ってゆき、失っ

*2『唐詩三百首』所収劉叉の詩に「野夫怒見不平事、磨損胸中万古刀」という詩句がある。「一田舎の村夫でも、世の中の不平を目にする度に、心の中の義憤の刀をすり減らしてきた」。野夫というペーンネームはこの詩から取られたものである。

た正直を取り戻せば良いだけのことである。我々の心が正直であれば、善悪美醜を判断することができ、つまり正邪是非を深く知ることができるのである――これこそが、著作者の基本的な品性なのだ。また、このことによってのみ、真に魂の自由に到達することができ、著作を価値あるもの、恥じることのない正しい行いとすることができるのである。

そこで、私は深夜に筆を執って、あの良心のごとく目覚めている公民のために、酒を飲んだ後の私の物語の中に、この時代の来歴を語るのである。彼らはすでに知っていて、聞き飽きたかもしれないが、しかしそれは彼らが聞いてきたものである。私の話は私だけのもので、酔いの後でも心が痛むものなのだ。雪は大地に降るが、私が書いたものは詩句ではなく、骨を貫く寒気であり、悪世に向けた呪詛なのだ。

私は恩や恨みを忘れようと主張する者ではない。すべてを記録するのは、自らの贖罪を全うするためである。ただし同時に、あの恣の悪行を、歴史の中で必ず追訴しようとするものなのである――文字の追訴がなければ、社会正義を実現するすべがないばかりか、代々の腐敗した虐殺者に施しと僥倖を継続させることになるのだ。もし善が顕彰されず、悪をなしてもその恥が公になることを恐れなくてよいのなら、その罪悪は千秋万代にわたって繰り返されるであろうし、未来を畏怖する人間も永遠にいなくなるだろう。あらゆる罪悪が当然の事のように許されるのなら、この民族は畏敬も禁忌も永遠に失うことになろう。

独立中文ペンクラブに感謝する。実に気高いこの賞を評価委員会が私に与えて下さり、幸いにもあの歴代の受賞者とともにここに立たせて下さったことに感謝する。自由、これは我々の心の中に永遠に消えない灯であり、それは取るに足らない暗い我々の生活を照らすのみならず、一貫して仲間を求める目印になるであろう。

「自由著作賞」は茨の冠であり、骨に刺さり心臓を割く痛みである事は深く知っている。しかしそれは私の人生にとってはこの上もない冠である。この栄誉の光に導かれて、更なる真正の文学の戦列に立ち戻りたい。そして、この勇気と不屈の思いを、民間において弛まぬ努力を続けているすべての兄弟たちに、松明のように伝えよう。

ここに謹んで独立中文ペンクラブに対して敬意を捧げる！　心に自由を渇望し、尊厳をもって著作する、すべての人々に敬意を捧げる！

二〇一〇年一二月二〇日　香港にて

目次

この世の挽歌——日本語版自序 xv

この人生にとどまり、
松明を新しい薪に伝える——序に代えて xxiii

Ⅰ 長江に消えた母——母の失踪十年を祭る 1
Ⅱ 地主の悲劇——土地改革と一家崩壊の年代記 23
Ⅲ 墓の灯り——祖母の思い出 79
Ⅳ 組織に引き裂かれた運命——大伯の革命と愛 113
Ⅴ 斜陽の世に生を享けて——幺叔の物語 187
Ⅵ 別れの夢は日に遠し——亡き友李如波を悼む 213
Ⅶ 畸人劉鎮西 263
Ⅷ 革命時代のロマン 297
Ⅸ 刑場に引き立てられた青春 321
Ⅹ ある料理人の話——掌瓢の黎爺 351

故郷・故人・故事——跋に代えて 389
自撰年譜 402
解説　野夫と江湖文学　王　小林 427

凡例

一、本書は『郷関何処』（中信出版社、二〇一二年）と『江上的母親』（台湾南方家園出版社二〇二〇年）を底本とし、その中から著者本人によって選ばれた十篇を翻訳したものである。

二、本書の翻訳は分担の形で進められた。佐々木猛が原案を作り、それをもとに木田章義と王小林が草案を作成し、さいはて社編集部との会議を経て、最終案を完成させた。

三、文中の（ ）は著者による自注であり、［ ］の割注は訳者による。

四、傍注はすべて訳者による。

五、本書に登場する地名と家族関係が分かるように、木田章義が地図と系図を作成した。

六、巻末に掲載した年譜は、日本語版の出版にあたり、著者本人が作成したものである。

Sample

I

長江に消えた母

——母の失踪十年を祭る

Sample

江上的母親 — 母親失踪十年祭

A Mother to the River Gone

On the tenth anniversary of my mother's disappearance

一

これは心にかかって、ずっと筆を執るのを躊躇してきた文章である。軽く触れるだけでサッと切れてしまう絃が、胸にきつく張られているかのようだ。大きな石が喉もとにのしかかり、不安で眠れぬ数えきれない夜に、暗闇の中で心臓は割かれ肺はえぐられる。なにも言わず心に念ずるだけで、私が命を托すこの世の少しばかりの虚妄の自足を打ち砕くのに十分である。

今年もまた、江南［長江下流南部］に霜の下りる季節がやって来た。秋の川の水は冷ややかで、次第に寒気が迫ってくる。ちょうど十年の時が経ったが、北国に身を寄せる私も、氷のように冷たいあの川辺に、戻ろうとは思わない。川に身を投げて失踪した母が、今はいずこの月の光のもとに屍をさらしているのか、想像できないし、したくもない……。

二

母が晩年まで持ち続けた強い性格からして、私は彼女が「右派」*1とされたのは、必然の事であったと信じている。このようにいうのは、単純な宿命観に基づくものではなく、誕生の最初から、血の中にその父の烙印が押されていたことを指している。彼女は一生をかけて「国民党軍」*2のあの将校との血縁関係を断ち切ろうと努力したのだが、結局は徒労に終わった。

私の母方の祖母は、江漢平原［長江と漢水の間の平原］の名門の令嬢で、その父は民国初めに日本に八年間留学して、帰国後、甘粛省の高等裁判所の所長になったが、その前に湖北省天門県の名族であ

＊1　共産党に意見を持つ人々に冠した名称。一九四九年の建国以来、共産党は民主党派と協力して国家運営していたが、政治に関する意見を聴取するために一九五六年から「百花斉放 百家争鳴」（各人自由に意見を言う）という政策を打ち出し、さまざまな意見が出された中に、共産党に対する批判があったので、方針を変更し、共産党に意見を持つ人々を「右派」と称して、「反右派運動」を起こして、排除に動いた。

＊2　中国国民党の「国民革命軍」のこと。一九二五年以降、共産党と協力して日本軍と戦ったが（国共合作）、日本の敗戦後は中国共産党と戦い、敗れて台湾へと移り、中華民国国軍となった。国府軍、重慶軍とも呼ばれた。ここでは父親が国民党の軍人であったことを言っている。

る劉家と姻戚関係を結ぶことに決めた――当時の劉家の三男（私の母方の祖父）は黄埔軍官学校*3の第八期の士官候補生となり、軍人の人生を歩み始めていた。あったであろう短い幸福な日々のあと、戦禍の絶えない時代の軍人の妻となった祖母は、私の母を連れてその孤独な一生に足を踏み入れた。

抗日戦争*4が勃発すると、祖父は蔣介石*5が重慶市に撤退するのに付き従った。劉家の曽祖父はすでに世を去り、家は日に日に凋落していった。その地域［湖北省］は日本軍・国民党軍・共産党軍が衝突する地で、どこも短期の占領が繰り返され、名ばかりになった劉家のお屋敷は、食料や金品を略奪する標的となった。祖母はうら若い母を連れてあちこちに身を隠し、放浪離散の苦しみを嘗めた。娘が辱めを受けるのを恐れて、最後には同郷の旅商人に托して、母を湖南省西部の伯父の家に避難させた。母はそこで辛苦を嘗めつくし、まるで下女のように働きながら学校に通った。

三

日本軍が投降したその年、母は故郷に帰って祖母を探すという困難な道を一人で歩み出した。

綿花を摘んでは糸を紡いでその日を暮らしている祖母を見つけた時、大難の後に再会した涙が、二人のみすぼらしい衣服に染み入った。翌年、故郷の人の話では、祖父が故郷に錦を飾り、少将として武漢に駐留したという。母は武漢に父を訪ねたが、彼女を待っていたのは晴天の霹靂であった――祖父は妻と娘が幸いにも生きているものと信じることができず、すでに新しく妻を娶り、子をもうけていたのである。しかも、結婚していた事を隠していたので、妻の存在を認める勇気はなかった。

悲しみ憤った母は、父親の盛大な酒宴に乗り込んだので、その時、世間は大騒ぎになった。祖父は帰郷して祖母に離婚を迫り、それからは父と娘は反目し、私の母は決然と名を改め、姓を変えて父方と縁を切った。

天道は往還する。一九四八年に、次々と敗走し続けた祖父は、命をうけて湖北省恩施県に軍を移したが、その途中で待ち伏せ攻撃を受け、流れ弾が彼の壮年の胸を貫いた――そして最後に柩を運び、葬儀を執り行ったのは、生涯寡婦であった祖母だった。

＊3　中国国民党の孫文が一九二四年六月に広東省黄埔に開設した中華民国陸軍軍学校のこと。蔣介石が初代校長、共産党も協力した。
＊4　一九三七年、盧溝橋での戦闘から始まった中華民国と日本との戦争。日本では日華事変、支那事変とも呼ばれた。
＊5　孫文の後継者として中華民国を統一しようとした。中華民国国民政府の主席となり、国民党軍を率いたが、共産党との戦いに敗れて台湾に逃走した。

武漢は翌年に共産党政権にかわり、母は「人民革命大学」*6の学生募集に応募し、卒業した後は、鬼神のなせるわざか、恩施に配属されて匪賊*7討伐と土地改革*8に精を出すのであった——父親が命を落とした道を歩み出したのである。危険に満ちたこの山道で、母は私の父とめぐり会った。平原に捨てられた将軍の孤女、山中に落ちぶれた土司*9の遺児は、かの偉大な動乱の時代にあって、偶然にして、また必然的に父と結ばれて、深山に根を下ろすのである。

四

祖母は早くに夫を許していたが、私の母は父親を永遠に恨んだ。母は現実世界の中では懲罰を下すことができないので、精神の世界で虚構の報復を行なった——姓名の改変である。このような父をもったことを認めず、祖母にさえ夫を許させようとしなかった。

しかし、この種の謀反は自らの鬱憤を晴らす程度のものにすぎない。というのも、この政党［共産党］は、個人の血統に注意を払って、その階級の属性を検討するのであるから。革命大学に出願したその日から、彼女は無数の記入用紙に立ち向かうことになった。彼女はいつも、自分は父親の、あの階級の捨子であるが、自分と母親は苦難の庶民に属することを説明しようと

試みた。しかし、記入用紙は彼女の弁明を制限し、同時に予見をもったレッテルを彼女の顔に張りつけた。

前世紀には「出身、経歴に問題がある」という殺意に満ちた言葉が流行し、母はこの言葉に圧迫されて、実に辛い思いをした。お前は軍閥の娘なのか、と言って彼女を批判する者の詰問にあうと、矛盾に陥った。彼女は誰よりも父親を憎んだが、人々からは彼女も同じ敵であると見られた。この父は、生前に彼女を捨てたのみならず、死後も長い間彼女を傷つけ続け、彼女は、この血縁の魔の沼から抜け出すことができなかった。

一九五七年に、母はちょうど三十歳になっていた。遥か遠くの省都［武漢］から来たこの女性は、みずからの教養を、あの土家族*10の部落［恩施］に植え付けようと試みた。その率直と剛毅は、却って善意を敵意に変えることが多く、彼女の共産党に対する意見とその出身が結び

*6 共産党が支配権を確立するごとに各地で設立された。主として地方の行政幹部を養成する、半年期限の施設で、本式の大学ではない。
*7 掠奪や暴行を行う反社会勢力。非正規の武装集団。
*8 共産党の支配化の土地で、地主の土地を取り上げ、小作農民に配分する改革。この時に、地主とされた人々を拷問したり、吊るし上げたりして、地主とされたたくさんの人々が殺された。
*9 西南地域において当地の統治権を認められた少数民族の首長。
*10 中国少数民族のひとつ。湖北・湖南・四川各省の接する地域に分布し、土家語はチベット・ビルマ語族に属するとされるが、話者は多くない。

つけられた時、右派として長い三角帽子*11をかぶせられて、労働者による監督を受け、労働による改造*12を受けるしかなかった。二十年の後に徹底的に名誉を回復した時、母はすでに老いてしまい、蒙ってきた屈辱と損害のすべてを、誰に償ってもらったらよいのか、わからなかった。「右派」とする判決と名誉回復は、ともに一枚の紙であったが、前者は泰山より重く、後者は鴻毛より軽い*13ことを、彼女は思い知った。

五

文革*14が始まった時、鉱山長だった父はいち早く打倒され、母の僅かな賃金で家族全員の生活を維持することになったが、当時母は田舎町の購買販売組合［供銷合作社］の、両手で算盤をはじく会計係であった。出身階級が悪いために中学を退学させられた上の姉は祖母に連れられて平原に帰って農業隊に加わり、下の姉は鉱山の労働に行った。父は大病を患って武漢の病院に入院し、十歳の私も肺結核に罹り肺に穴があいて命も危ない状態にあった。家族はこのように四か所に散り、人生で最も険悪な歳月に入った。母を攻撃する大字報*15がドアや窓一面に張り付けられ、家財の没収が繰り返され、ミシンまでもが掠め取られた。母は私を連れて、屈辱に

耐え、重荷を背負って、田舎町の医者を訪ねて薬を求めた。彼女は倒れるわけにはいかなかった。破壊された一家を引っ張って、一人も欠かすことなく守ろうとし、不確かな明日に向かっ

*11 紙で作られた先の尖った背の高い帽子で、標的となった人物の罪名などを書き、民衆の前で引きまわすなど、その人物を辱めた上で断罪した。

*12 右派的あるいは反革命的思想を持つ人を、労働によって矯正すること。人民民主独裁制や社会主義制度に異論を持つことは違法とされ、労働改造所や強制収容所に送られた。

*13 『文選』四一巻、司馬遷の「報ズル任安ニ書」にある「人ハ固ヨリ有リ一死一、或イハ重ク於泰山ヨリ一、或イハ軽シ於鴻毛ヨリ一、用ノ趨ムク所異ナレバナリ」（人には死ぬことは免れないが、価値ある死と無駄な死がある。何のために死ぬかが異なるからである）を元にした句。泰山は山東省にある道教の聖山、鴻は「おおとり」。「泰山鴻毛」ともいう。

*14 文化大革命の略称。正式には「無産階級文化大革命」。毛沢東やその取り巻き（四人組）などが、政敵や守旧派を引きずり下ろすために、中学生、高校生を始めとする若者を煽動して「紅衛兵」と名乗らせ、全国的に激しい政治闘争を展開した。

民衆を「紅五類（労働者、貧農、革命幹部、革命軍人、革命烈士）」と「黒五類（地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派）」に分け、黒五類を徹底的に弾圧した。黒五類に分類された人々は、様々な差別や弾圧を受け、投獄、拷問、殺人、虐殺が各地で行われた。特に人民裁判と称して、黒五類を公開裁判にかけ、人々を集めて、その前でさまざまな辱めを与え、監獄へと追い込んだ。黒五類以外に「臭老九（九番目の鼻つまみ者＝教員）」というレッテルもあり、教員などの知識階級も苦しい生活を余儀なくされた。小学校から大学まで授業は行われず、学生・生徒達は、街頭に出て、守旧派のレッテルを貼られた家々を家捜しし、古い物は封建的として没収したり、焼いたり、破壊して回った。寺院の仏像や石像も、首を切り落とされた。後には、軍隊までもが二派、三派に別れ、激しい戦闘も行われた。

一九六六年から始まり、一九七七年に終息宣言が出た。人民共和国建国後の「大躍進政策」によって疲弊した社会が、この運動によってさらに混乱を増し、文革終了後には荒んだ社会になっていた。

本書で描かれているのは、人民共和国建国以前の国民党・共産党の戦いから、建国後のこのような激しい混乱の中を生きた人々であり、道徳も家庭教育も壊滅した異常な社会を背景としている。

*15 自己の主張や攻撃対象の罪名などを書き立ててあらゆる所に貼ったポスター。政治運動の手段として用いられた。

て歩んでいった。

ある日、彼女は、私を連れて県都の医者に行ったその帰り道、知り合いに便乗する車を手配してもらったが、運転手は、町を出たところでわれわれに降りるように言った。生涯人に頭を下げなかった母は、このときばかりは私のために懇願したが、土埃をあげて走り去る車を見ながら、悲しみ憤った。しかし、子供にはその窮迫と困惑を見せたくないので、黙って涙を飲み込むほかなかった。この世の悪がこのようにまでなるとは、人の心が時代によってここまで捻じ曲げられるとは、彼女はまったく理解することができなかった。

小学校を卒業した後、伝染病にかかっているという理由で中学校の入学を許可されなかった私は、短い期間であったが、少年樵夫として過ごすことになった。夕日に照らされ、薪をかついでよろよろと帰るとき、仕事が終わって私を迎えに来た母を遠くに見た。そのころ母は憔悴していて、乱れた髪の毛は風に吹かれていた。彼女が高貴の人であったと、誰が知ろうか。二人の姉はいずれも退学させられており、母は、私をこれ以上放っておくことはできず、文教事務所[*16]の所長に頼み込んで、ついに私を中学校に入学させた。

六

母はすべての家族とともに、一九七八年を迎えた。父は栄転し、母は名誉を回復し[*17]、上の姉は就職し、私は大学に合格し、祖母はわれわれのもとに戻って来ていた。この頃の母はいつも笑顔を絶やさず、善良は必ず報いられるものと信じていた。かつて一家を迫害した人々が我が家に来た時も、母は言葉も表情も昔のままだった。

一九八三年に祖母が世を去り、八五年に父母が退職し、八七年に父が癌を患い、八九年には私が警察を辞職し、その後投獄されて、母の辛い人生がまた始まった。

父は息子に再び良い日が来るとひたすら待ち望んでいたので、毎年、一度二度の手術の大きな苦痛に耐えた。彼の身体の器官は少しずつ切り取られたが、生きる意志だけで強く生きてい

＊16　教育の発達していない地方に設置された教育関係の出張所。
＊17　文革は一九七七年に終了宣言が出され、文革時代において誤った有罪判決や誤った評価を受けた人、強制労働や投獄された人々に対する名誉回復が開始された。

〈解説〉

野夫と江湖文学

王　小林

Sample

一

本書は、作家野夫による人物記である。合計十篇の文章は、血縁を中心に同心円のように広がり、野夫自身の言葉でいうと「すべてが私の身辺で本当に起こった生死・離散・愛恨」（xx頁）の物語である。

十数年前、友人に勧められて、本書の中国語版『郷関何処』を香港で読み、たちまち圧倒された。中国にこんな作家もいたのかと驚き、野夫という名前もはじめて知った。ただ当時は、十数年後の自分に、本書の解説を書く重責が降りかかるとは、夢にも思わなかった。

しかし、考えて見れば、この不思議な巡り合わせには、運命の必然も含まれていた。というのも、いま十数年ぶりに本書を再読すると、そこに記されているすべては、現代中国の出来事というだけでなく、私自身の出来事でもあり、その中のすべての人たちに、著者と遠く離れた異なった土地でありながら、私も会っていたからである。再読することで、記憶がフラッシュバックし、思いも遠い過去へと引きこまれてしまった。

二

野夫の幼時の記憶は、文化大革命の最中、機関銃を家の前に据えつけられた脅迫と侮辱（第Ⅲ章）に始まると記されている。あろうことか、それとほぼ同じ時期に、西北部の田舎の外祖父に預けられていた私も、ある日、突然現れた武装集団に家を囲まれた。建国時の共産党に協力し、全人代の代表を初会議から数期つとめた外祖父は、あの混乱の中で、林立する政治グループのひとつに狙われていたという。銃剣を見て叔母の腕の中で震える四歳の自分が、この世界での私の最初の思い出である。

やがて通い始めた学校では、毎朝「救世主」として讃えられていたあの人の肖像に向かって「万歳」を唱えることから始まり、黒板に「〇〇〇万歳」と大書されたスローガンを大声で読ませられた。その学校も文革の混乱で崩壊し、私は野夫のような「木樵（きこり）少年」（第Ⅴ章）ならぬ「草刈り少年」となり、大きなかごと鎌を持って、仲間の悪童どもと村や周辺の野原を毎日さまよっていた。電気もラジオもなかった田舎で、文化とのふれあいなどなく、まさに雑草のごとく成長していった。これが救世主と呼ばれたあの人の「読書無用論」の思惑――草のように生え、草のように枯れる「草民」になれ――であることに気づくには、ずいぶん時間がかかった。そうした生活の中で、「幺叔」（第Ⅴ章）のような下放された読書人にこそ出会えなかったが、映画『芙蓉鎮』*1に出てくるような、人目を憚（はばか）りながら生きる地主をよく目にしていた。その土作りの家の歪んだ扉は、錠前がなく、労働に駆り出される日などには、辛うじて紐で結ばれていた。

地主といえば、私の親類にもいた。大人に連れられて、年に二、三度、十数キロ離れた田舎町にある外祖母のお姉さんにあたる人の家を親戚まわりしたことがある。そのご主人だった老人は、土地改革で地主のレッテルを貼られていたため、私たちが行くと、いつもそっと立ち上がり、裏口の方へ姿を消した。その顔を正面から見たことは一度とてなく、背中に漂（ただよ）

*1 一九八六年に公開された中国映画。中国南西部の田舎町で政治運動に巻き込まれる飲食店経営者、右翼分子、地主などの運命を描いたもの。

う羞恥と引け目のようなものを、子供心にも感じた。

「畸人劉鎮西」（第Ⅶ章）の話に関して、著者は、香具師（やし）の劉さんとの初対面を「一九七七年、利川の高校に通っている時に私は劉さんを見知った。……彼は、広場の舞台の上で後ろ手に縛られ、さらし者になっていた」と記している（二六六頁）。その前の年に「救世主」が亡くなり、「四人組」が失脚した。しかし、文革はまだ続いていた。あたかも同じ時期に、中学生だった私も学校の反革命分子の批判大会に参加していた。グランドに建てられた臨時の舞台に、初老の男性とその息子が後ろ手に縛られ、首から「反革命分子×××」のプラカードをかけられていた。二人とも、腰を九十度に曲げた格好で数時間も立たされていた。批判大会がつづく間、その男性が額から滝のように汗を滴らせながらも、同じような格好をさせられ隣に立つ息子をしばしば気遣っていた表情が、最前列に座っていた私の記憶に深く刻まれた。陝西省の地方都市と湖北省の片田舎で、似たような見せしめが同時に行われていたのだ。

目の悪い劉鎮西は、家族を養うために、いつも手探りしながら、遠い門出をしなければならなかった。旅先で稼いだわずかのお金を家族に仕送りし、一年のほとんどをさすらいの中で過ごしていた。その劉さんの生き様にそっくりの人物にも、私は何人か会っていた。

まだ小学生だったある日、田舎の家の軒下に、泥まみれの中年の盲人がひとり雨宿りに迷い込んだことがある。聞けば生計のために遠くにある田舎町へ行くという。外祖母から差し出された乾パンを頬張りながら、朗らかな声で身の上を話すその男は、雨が止むと手探りで泥んこの道を去って行った。

田舎の市（いち）で数回出会った、「猫いらず」を売る一人の香具師の風貌も、劉鎮西と重なった。

田舎では珍しく眼鏡をかけたその男は、なぜかいつもヒマラヤ山麓の伝説の池から話を始めた。その口上が大好きだった私は、市があるたびに人混みの中へ入り、夢中に聞き入っていた。当時、市そのものは、「資本主義の尻尾」と呼ばれ、禁止されていたにもかかわらず、人々は集まり、大事にとっていた卵などで、現金を作ろうとした。そこへよく紅衛兵がやってきては、「資本主義の尻尾を切る」といって、片端からちっぽけな売上金や品物を没収した。そこに野夫のような人が手を貸す場面はなかった（二八二―二八四頁）。思えば、私がその香具師を見たのは資本主義の尻尾を切る時代であり、野夫が劉さんを手伝ったのは、資本主義の尻尾を容認する時代であった。その時代を決めるのは、民草に関係なく、すべて救世主の思惑次第であった。

恐らく大飢饉の時に河南省から流れ着き、村はずれの窑洞（ヤオトン）*2を仮の住まいとする、「窑婆子（ヤオポーズ）」（ヤオトン婆さん）と呼ばれていた老女のことも思い出された。彼女は「生産大隊」*3の一員には数えられず、常にその周辺で徘徊し、村人から恵まれた何かしらの物で命をつないでいた。その老女と年齢の近い野夫さんの祖母（第Ⅲ章）は、家族との離散と団欒を繰り返す、生涯不安定な暮らしを送り、異郷で亡くなったが、最期は家族に見守られ、遺骨は故郷に埋葬された。しかし、一歩間違えば、彼女も、私が見た「窑婆子」のような運命をたどっていたのかもしれない。名前も家族もないその老女は、本書第Ⅱ章に見える下の伯父――「彼は洞窟に身を寄せ、羊を追って、そのいくばくも無い余生を維持していた。そして……山中で静かに枯れた。」（七四―七五頁）と同じように人生を終えた。墓など当然なかった。

*2 黄土高原の断崖や斜面に掘った洞穴の住居。

*3 一九五八年から一九八四年まで存続していた中国社会主義農業経済体制を構成する人民公社の下にある末端組織。一九八四年以降、家庭連産請負責任制の実施による人民公社の解体に伴い廃止された。

三

少年時代の記憶の百分の一にも満たぬこれらの情景は、これまでの人生で、何かの折によく思い出されたが、家族も含めて人に語ることはなかった。想像してもらえないような世界をあえて人に語る必要はないと思ったし、きっかけもなかった。とくに最近、ＡＩという見えない手に操られて、真実の探求よりも役に立つことを優先する世界を見るにつれ、進歩とは一種の錯覚と幻覚にすぎないのではないかという思いをますます強くする。今さら私が、半世紀前に経験した、共産という架空の目的を優先する世界のことを語って、何の意味があるのだろうか。

それに加えて、私は生来いわゆる悲惨な話に生理的な嫌悪を覚えるもので、中国現代文学（世界的な文学賞を獲た作家も含めて）には一貫して冷ややかであった。悲惨な話ならこの世界で毎日のように起きているし、それを売り物にする者は、道端で自分の傷口を人に見せびらかす乞食と変わらず、惨めさの顕示は、憎悪の婉曲的な表現に過ぎないと考えるからである。現に我々が小さい時に受けた教育の中で、「解放前」の惨めさを吹き込まれ、新政権への忠誠心と他者への憎しみをどれほど強化されたか分からない。

ところが、本書を読んでいると、自分のそうした個人的な記憶、人に語ろうとしなかった心情も含めて、それこそが実は歴史そのものであることに気付かされ、それらを正面から見つめ直さなければ、人生を偽ることになるだけでなく、この世界を操作している見えない手

に対する隷従なのではないかと思った。私は、野夫の文学にみなぎる、現代中国文学に久しく見られなかったある種の力に突き動かされたのだ。中国の現代文学において、このような力を感じる文学は、魯迅以来、久しぶりである。

本書の編集会議でも、木田章義先生は、しばしば野夫のことを魯迅と引き合いにして、「百年前に魯迅が現れ、百年後に野夫が現れた」という趣旨のことを述べられた。中国人として、若い時から魯迅を愛読してきた私も、両者の文学に多くの共通点を認めた。

もちろん、魯迅と野夫の文学には鮮明な違いもある。魯迅の文学は、『阿Q正伝』の阿Qをはじめ、『孔乙己』、『薬』、『祝福』、『孤独者』など、どれを取ってみても、「真の人間」とは何か、中国人の「国民性」（今となっては大いに問題のある概念であるが）とは何か、無知蒙昧な民衆の病を治すのにどのような方法が必要か、といった問題意識から、作中人物に対して、文明論的な高みから批判する姿勢が読み取れる。

魯迅がこのような問題意識を持てた理由は、従来の研究が主張する、いわゆる「革命思想」のみにとどまらない。キリスト教神学をはじめ、ニーチェの超人論や進化論などに強い影響を受けた魯迅は、とりわけキェルケゴールなどの神学的精神論に触発されて、中国人の精神世界を解剖してみせた。そのため、魯迅の文学は、儒教社会に閉ざされてきた中国文化の病弊を白日のもとに晒し、思想的な高みに達した一方で、主体性のない阿Qのような人物とそれを取りまく大衆をしばしば「虫けら」と喩え、「お前たち、改めるがいい！　真心から改めるんだ」（『狂人日記』）と呼びかけたりもしてきた。

ところが、本書に見られる野夫の筆致は、魯迅のように人間を俎上に乗せて分析解剖する

手法を取らず、あくまでも主人公の人生に寄り添うようにして、その喜怒哀楽を記し、人間性の発露の瞬間を見せてくれる。登場人物たちに注がれる人間愛に満ちた野夫のまなざしは、本書のすべての作品に通底している。

野夫の作品には、魯迅を思わせる用語やレトリックだけでなく、魯迅からの引用も多く見られる。野夫自身も、もっとも影響を受けた文学者として、一位に魯迅を挙げている。両者の継承関係を印象づけるのは、現実の虚飾の仮面を剥ぎ、血なまぐさい社会に立ち向かう勇気を持っている点にある。

「私は、いざ執筆を始めると、何かを気にして躊躇（ちゅうちょ）するようなことは一切ない」という言葉を直に野夫から聞いたことがある。本書を含むその作品には、他の作家のような、体制が引いたレッドラインを意識する姿勢は見られない。妥協か、それとも破滅か、常に二者択一的な状況に面してきた現代中国の文学者にとって、この問いかけの持つ意味は重い。野夫のこの躊躇しない姿勢は、魯迅から継承したものと言ってよい。

そもそも儒教文化が支配する中国では、正統の学問や文学というものは、士大夫層の文章、詩文が優位を占め、それは「道統」とも呼ばれるように、統治に奉仕する道具とされ、権力の象徴でもあった。そのため、いわゆる文学者も、「道統」から外れることを恐れ、ひたすら体制の中での栄達を求めてきた。それは古代から現在まで続いてきた、中国独特の伝統でもある。

そうした、権力に従順であり虚飾をかざる文人に対して、早くも魯迅が、「目を開いて見ることについて」（「論睜了眼看」）という文章において批判している。

［社会の問題は］最初から正視しなければ、次に正視できなくなる。もっと後は、自然に視（み）なくなり、そして視えなくなる。……しかし、自分の矛盾や社会の欠陥による苦痛は、正視しなくても、身に降りかかってくる。文人は敏感な人種で、その作品の中に不満を匂わす者がいたことは分かる。しかし、欠陥の暴露をする間際に、彼らはいつも急に「そんな問題はない」と言い出し、それから眼をつむってしまう。……それだから、問題も、欠陥も、不平もないし、解決も、改革も、反抗もないのだ。

このような現実に目を瞑（つむ）る中国の文人への反抗と批判は、二十世紀初頭、魯迅たちが生きた、啓蒙運動の盛んな短い期間においては可能だったが、一九四二年の毛沢東の「延安講話」によって、文学は党の宣伝道具として定義され、作家は路線に沿って創作しなければならなくなり、政治方針の広報機関に堕した。

注目すべきは、野夫の文学が、そのスタートの時点から、魯迅の主張する社会現実に立ち向かう姿勢を貫いてきたことである。それは、体制に流される「高名な」文学者たちにとって、決して面白いことではない。本書の序文の言葉を見よう。

栄冠を手にした立派な著名人は、著作は身の丈ほどもあるのに、まったく人間の言葉は持たない。彼らはその時に存在する検閲や弾圧そして冤罪による投獄を見て見ぬふりをしながら、あろうことか世界に対して恥ずかしげもなく公言する——ここは創作が自由の国だ。（xxv頁）

ここにいう「栄冠を手にした立派な著名人」たちを、魯迅がその『復讐』の中で取りあげたもろもろの体制側に立つ者――「慈善家、学者、文士、長老、青年、雅人、君子」に重ねても違和感はない。魯迅から見れば、これらはいずれも、現実から目を背け、偽善と虚偽を飾って利得を貪る輩（やから）である。そうした状況は、二十一世紀の今になっても好転せず、とくに近年、市場経済の導入で、作家の創作に若干の自由が見られるようになったものの、骨抜きにされた文学は、もはや魯迅がいう「もの言わぬ自国民の魂」を追求する文学ではない。それに代わって見られるのが、体制を気遣いながら、小賢しい知恵と技巧を売り物にする読み物の氾濫である。それはまさに野夫がいう、

> 学問のある無数の人は、著述を一種の計算方法とするしかない。この全体主義が作り出す功利的な犬儒主義の時代では、彼らは慎重に言葉を選びながら俗世の功名と利得を求める。（xxiv頁）

というような生き方である。ここにも我々は、百年前に儒教の伝統に立ち向かい、知識人や文学者の偽善性と欺瞞性と戦った魯迅に通じる姿を見る。

野夫がその文学を通して実践してきたことは、世界文学の角度から見れば、ありふれた基準と常識なのかもしれない。それでも現代中国文学にとっては、彼の文学は異端とみなされ、しばしば攻撃され、著作は今でも禁書とされている。これは、野夫の存在そのものが鏡となって、偽善と欺瞞で世を欺（あざむ）き、名を盗もうとする者たちの姿を映し出しているからであろう。

そこに中国現代文学の後進性というものを認めざるをえない。

四

体制に密着する現代中国文学のものさしで野夫の文学を評価することは不可能である。では、その文学を我々はどのように位置付けるべきだろうか。

一度、チェンマイの山中で、彼の文学のあり方について、野夫本人に正面から尋ねたことがある。すると彼は、「民間写作（ミンジエンシェーツー）（民間著作）です」と、その場できっぱりと答えてくれた。この答えに私は納得した。「民間写作」という言葉を聴く以前から、彼の作品に頻繁に出てくる「江湖」という用語に目を引かれていたからだ。

そもそも中国語の「江湖（ジャンフー）」は、多重にして複雑な概念であり、「世間」の意味に近い日本語の「江湖（ごうこ）」のように一筋縄では行かない。そこでは、中国社会に存続する「江湖」の倫理構造に擬制的家族関係が認められるだけでなく、そこを中心として生産される文芸の世界も、知識人による従来の文学の世界とは異なり、流民社会の物語を意味する。要するに「江湖」とは、礼と法の秩序の外の、流民が住むアウトサイダーの世界をさすのである。かつてマックス・ウエーバーは、このような世界を儀礼的に遮断（Ritualistic segregation）された世界と呼んだが、「儀礼的遮断」とは、儒教倫理（礼）と官僚体制（法）による体制的な排除にほかならない。そうした性格をもつ「江湖」が、中国の歴史において、専制国家の体制の下で絶えず再生産され続け、文化的な流民の世界は、昔も今も健在なのである。

自らの仕事を「民間写作」と称し、書名と文章に「江湖」という言葉を愛用する野夫の文学は、作家の自由意志を抑圧しようとする体制の中で、あえて儀礼的に遮断された文化的流民を描くことによって、その体制に抗してきた。したがって、野夫の「民間写作」は、アウトローたちが活躍する『水滸伝』の「江湖」とも、あるいは現実意識を麻痺させるために不満や欲望を妄想のうちに消耗させる金庸（ジンヨン）ごときが描く「江湖」とも無縁な、いまも陽の当たらぬところで生きる人たちの声を代弁する文学なのである。そのような意味で、野夫の「民間写作」を、私はあえて新しい「江湖文学」と呼びたい。

人はこの世に生を享けた以上、享受すべき尊厳というものがあり、それは何者かに、加えられたり、引かれたり、侵害されるべきではない。野夫の文学は、我々の身辺にいながらややもすると忘れられがちな「江湖」の中で、絶望と苦難を背負いながら生きる者の貴さを讃え、その魂に捧げられる祈りである。

Sample

◎著者紹介

野夫 ― やふ ― Yefu

一九六二年に中国湖北省利川県で生まれる。本名は鄭世平。武漢大学卒業後、公安部門に勤務したが、天安門事件を機に辞職。出版社経営などを経て、自由作家、詩人、ジャーナリストとして活躍。台北国際ブックフェア大賞など、複数の文学賞を受賞しており、海外でも高く評価されている。

◎訳者紹介

佐々木 猛 ― ささき たけし

一九四八年に滋賀県栗東市で生まれる。元大阪大学教授。

木田 章義 ― きだ あきよし

一九五〇年に大阪府大阪市で生まれる。京都大学名誉教授。

王 小林 ― おう しょうりん

一九六三年に中国陝西省西安市で生まれる。東西哲学研究所代表。

Sample

長江に消えた母

二〇二六年六月二七日　第一刷発行

著　者――野夫
訳　者――佐々木猛・木田章義・王小林
発行者――大隅直人
発行所――さいはて社
〒五〇五－〇〇六七
滋賀県草津市新浜町八番一三
電話　〇五〇－三五六一－七四五三
FAX　〇五〇－三五八八－七四五三
https://saihatesha.com
info@saihatesha.com

装幀者――早川宏美
組版者――田中聡
校正者――田中奈保生
印刷所――共同印刷工業
製本所――新生製本

Copyright©2026 by Takeshi Sasaki, Akiyoshi Kida, Xiaolin Wang
Printed in Japan
ISBN 978-4-9912486-9-6

Sample